

の厚さを考えると二つ以上の層にあらわれるという難点があり、特に高層雲、乱層雲などは頂の高さの範囲がわからなかったが、航空機による観測資料が多くなってくると、これらの雲は三層のいずれにも所属できないことが確かめられてきた。そこでこの改正では雲のできる対流圏を階層 (stage) でわけ巻雲、巻積雲、巻層雲は上層に、高積雲は中層に、層雲、層積雲は下層によくあらわれるとし、a) 高層雲は通常中層にあらわれるが上層にもおよぶ、b) 乱層雲は通常中層とあらわれるが上層、下層におよぶ、c) 積雲 積乱雲は底は通常下層にあらわれるが、中層、上層までのびるという remarks がつけ加えられている。以上の理由により1962年1月1日から気象庁の地上気象観測法には上層雲 (High Clouds)、中層雲 (Middle Clouds)、下層雲 (Low Clouds) の名称を廃止し次の表が採用された。

雲のよくあらわれる高さ

巻雲 (Cirrus) 巻積雲 (Cirrocumulus) 巻層雲 (Cirrostratus)	上層 High étage	極地方 3~8km 温帯地方 5~13km 熱帯地方 6~18km
高積雲 (Alto cumulus)	中層 Middle étage	極地方 2~4km 温帯地方 2~7km 熱帯地方 2~8km

(2) 巻雲、巻層雲、巻積雲の書き方の変更

高層雲 (Altostratus)	普通中層に見られるが、上層までひろがっていることが多い。		
乱層雲 (Nimbostratus)	普通中層に見られるが、上層および下層にひろがっていることが多い。		
層積雲 (Stratocumulus) 層雲 (Stratus)	下層 Low étage <table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="font-size: 2em;">}</td> <td>                             極地方地面付近~2km                              温帯地方地面付近~2km                              熱帯地方地面付近~2km                         </td> </tr> </table>	}	極地方地面付近~2km 温帯地方地面付近~2km 熱帯地方地面付近~2km
}	極地方地面付近~2km 温帯地方地面付近~2km 熱帯地方地面付近~2km		
積雲 (Cumulus) 積乱雲 (Cumulonimbus)	雲底は普通下層にあるが、雲頂は中、上層まで達していることがある。		

巻雲の読みを「かんうん」とすることに気象学会で一応決定したことについては天気 Vol. 9, No. 1, p. 26 に掲載された。

その後いくつかの提案があった (たとえば、天気 Vol. 10, No. 11. p. 29 および Vol. 11. No. 3. p. 80) その後、「かんうん」と読むことについて多数の人の反対があり、気象庁測候課では、なじみ深い発音を残すこととして、けん雲とするなどの意見を加味し、巻雲が絹のような光沢をもつ特徴をとり入れ、また「けん雲」では他の雲形名称とのバランスがとれないので絹雲を採用することとした。

1965年1月から、巻雲、巻積雲、巻層雲は絹雲、絹層雲、絹積雲と云うことに気象庁は統一する予定である。

(気象庁測候課)

(355頁より続く)

幹事交代について

永年幹事として事務局をあらかじめ頂いた一色光雄前幹事は都合により5月末日をもって幹事を辞任することになり、6月1日より浜本丈夫幹事が就任した。浜本幹事は主として法務関係の仕事を担当することにし、主として会計関係の仕事を補佐するために同日付けで中村順子氏が幹事補佐に就任した。

尚これにともなって気象学会の関西支部事務局は大阪管区気象台調査課から予報課に移った。

×	×	×	
×	×	×	×
×	×	×	

関西気象協会研究助成運営委員

関西気象協会からの要請により当学会支部から次の4名を代表として委員に推せんした。

橋本清美、中島暢太郎  
山元竜三郎、中野道雄

なお、大阪管区気象台から推せんされた野口篤美、萩谷長男、山本主夫、三沢基一の各委員および協会代表の内田泰、平林道夫、牧守真の各委員とあわせて合計11名の委員が任期4年で委員会を構成することになった。なおこの委員会は個人申請者からの申請題目を審査するだけでなく、積極的に助成すべき研究題目の開発にもとりくむことになっている。